



非童話

マッチ売りのライター

河野陽炎

目次

- マッチ売りのライター
 - 流れてきた桃を無視したライター
 - 「傘」地蔵とライター
 - シンデレライター
 - 助けた亀とライター
 - 仙人とライター
 - ずきんをかぶったライター
 - 白雪ライター
-
- 著者プロフィール

マッチ売りのライター

「企画が出せるまで帰ってくるんじゃないっ！」

「そう言われても、アイデアがぽんぽん出てきたら苦勞はしないよ……」

編集者に追い出され、街角で途方に暮れたライターはマッチを一本すりしました。

すると見えたのです。

マッチの炎の中に、最高のアイデアが書き込まれた企画書が！

でも、マッチの炎はいつか消えてしまいます。

「あぁっ消えないで！」

企画書の内容を読んで自分のものにしようと、ライターの手はもう一本のマッチに伸びます。

そこで、ふと気が付いたのです。

私はライター。マッチの炎に頼らなくても、自分で企画に火をつける力があるはず！

こうしてライターはマッチ売りをやめ、企画探しの旅に出かけるのでした。

川を流れてきた桃とライター

昔々、ライターが川で洗濯をしていると、大きな桃が流れてきました。

ライターは「企画考えて、今日中に提出しないといけないから、桃食べてる場合じゃない」と、そのまま桃を見送りました。

「傘」地蔵とライター

あるところに、ひどく貧しいライターが住んでいました。

ライター稼業において、原稿を書き上げ納品してから、原稿料が振り込まれるまでは非常に時間がかかることが多く、クライアント側も出版不況にあえいでおり、資金繰りが非常に苦しいのです。

下請法と言う法律もあるのですが……、いえ、その話はまた別の機会にして、貧しいライターの話に戻しましょう。

ライターは「このままでは新年を迎えるのも難しいなあ」と思い、手持ちの傘を売りに街へ出かけました。

しかし、傘はなかなか売れず、天気も悪化してきたため、諦めたライターは帰路につきました。

帰り道、ライターは雪の中に佇むお地蔵さんを見つけます。

「ああ、なんて寒そうなんだ。せめてこの傘を……」

ライターはお地蔵さんの上に傘を広げます。

さらに自分の使っていた傘も、さらに着ていたパーカーまでも差し出して、お地蔵さんを雪から守ります。

さて、ライターは帰宅しますが、誰も迎えてくれる人はいません。

「昔話の笠地蔵なら、優しいおばあさんが迎えてくれて『お地蔵さんのために、良いことをしましたね』と褒めてくれるんだけど……」

ライターはふと、留守電のランプが点滅していることに気づきます。

再生してみると、半年以上も支払いがなく連絡も途絶えていたクライアントからでした。

驚いてクライアントに電話をかけてみると、

「弊社の経営状態が厳しくお支払ができなかった原稿料、分割という形にはなりますが、必ずお支払させていただきますので……」

お地蔵さんはちゃんと、ライターを救ってくださったのです。

しかし、年末年始は金融機関が休みのため、ライターが実際に現金を手に入れられるのはお正月三が日を過ぎてからなのでした。

――

注 公正取引委員会「下請法」のページ <http://www.jftc.go.jp/shitauke/>

シンデレライター

あるところに、夜中まで働きまくっているライターがいました。

気の毒に思った魔法使いは、ライターがお城の舞踏会に行くことができるよう、ドレスや馬車を用意してやりますが、1つ注意を与えます。

「夜中の12時には魔法が解けるので、それまでには帰るんだよ」

「ええ、分かっているわ。だって私にはまだ仕事があるから、朝帰りするわけにはいかないわ」

お城での舞踏会は楽しく、夜中の12時が近づいたころ、ライターは慌ててお城から出ようとしています。

そしてガラスの靴を階段に落としてしまうのです。

舞踏会の中に、ライターに惚れてしまった王子様。

なんとしてでもライターを探し出そうと、街へ出かけ「この靴を履ける娘はいないか？」と呼びかけます。

しかし、夜通し仕事をして明け方から眠るという生活をしているライターは、そんなことはつゆ知らず、今日もベッドで眠っているのです。

助けた亀とライター

ライターが浜辺を歩いていると、亀がいじめられていました。

ライターはいじめていた子らを追い払い、亀を助けます。

「ありがとう。お礼をしたいので、龍宮へいらしてください」

「こちらこそ、お気遣いありがとうございます。でもパソコンとスマホが水没したら、仕事にならないんだ」

「龍宮では仕事なんてしなくていいので、パソコンやスマホはその辺に置いていったらいいですよ」

「ごめんね。機密保持契約があるから、他人に見られるような場所に放置していくわけにはいかないんだ。今度会えたら、また龍宮に誘ってね」

こうして亀とライターはお別れしたのでした。

その後も、仕事に追われる日々が続くライター。

「あのまま、パソコンもスマホも放り出して、龍宮に行ったほうが楽だったかな」とも思うのでした。

仙人とライター

大阪に働きに来たある若者は「仙人になりたい」と思いました。
そこで、「仙人になる方法を教える」という夫婦のもとに住み込みました。

夫婦にいいようにこき使われながらも、仙人になれると信じて疑わぬ若者。
そんな若者のことを、取材し続けているライターがいました。
雑誌社や出版社などに企画を持ち込んでも
「仙人になれるかどうか分からないのに、バカバカしい企画だ」
と相手にされず、取材にかかる費用は全て自腹です。

やがて20年の時が流れ、若者が仙人になる日がやってきました。
夫婦に「庭の大きな松の木に登れ」と言われ、木の一番高い梢にたどり着くと「手を離せ」と言われる若者。
ライターは思わず目をつぶります。

次の瞬間、空中に浮かびながら夫婦にお礼を言う若者。
「おかげ様で私も一人前の仙人になりました。」
ライターも啞然、茫然、愕然です。

若者は、一人前の仙人になることを信じ続けてきました。
取材を続けてきたライターも、「いつか、この取材が実を結ぶ」と信じ続けてきた、その純粋な心は、若者と同じだったのかもしれない。

注：：青空文庫「仙人 芥川龍之介」 →

http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/144_15208.html

ずきんをかぶったライター

ずきんをかぶったライターが歩いていると、オオカミが話しかけてきました。

「可愛いね。どこへ行くんだい？」

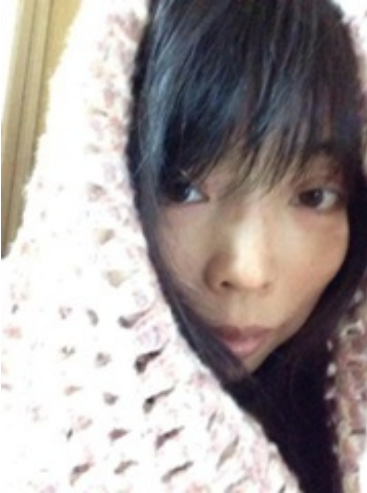
「おばあさんのお見舞いに行くの。おばあさんに喜んでもらうために、花を摘みながら行くのよ」

「.....行ってらっしゃい」

オオカミは思っていたのです。

「もうアラフォーだというのに、見舞いの花代をケチって野草を摘んでいくような女性は、きっと貧乏人だからロクなものを食べていないに違いない。それに、今の時代にピンクのずきんをかぶってるなんて、センスが悪いにもほどがある。食べても肉がまずいだろうから、見逃して別の美味しそうな獲物を待とう」

そしてオオカミが次に話しかけたのが、赤ずきんちゃんと呼ばれる少女だったのです。



白雪ライター

あるお城に、世界で一番美しいライターが住んでいました。
継母と一緒に住むようになりテンプレート通りのいじめをしてきました。

ついにある日、継母が依頼した猟師が、ライターを森の中に置き去りにしました。

ライターは森の中で小人たちと出会います。

「僕たちの家で一緒に暮らしませんか？」

「そこってWi-Fi飛んできますか？」

「……」

「……」

「やっぱ、森から出なくちゃダメかなー」

「継母に会ったらどうするの？」

「税務署への届出さえきちんとしておけば、どこででも仕事はできる。ペンネームと、加工しまくりの顔写真を使っていれば大丈夫だよ」

ライターはパソコンと周辺機器を抱えて去っていき、小人たちは日常生活に戻りましたとき。

著者プロフィール

河野陽炎（こうのかげろう）

ライター、コラムニスト。

大阪市大大学院・理学研究科修了（学位：修士（理学））。大阪南部在住。保有資格は応用情報技術者、一級小型船舶操縦士、メンタルヘルスマネジメント検定Ⅱ種、労働安全衛生法による特別教育（伐木等の業務）など10を超える。

3級FP技能士資格を持つライターとして、マネープラン、資産運用、生命保険、医療保険などの記事を数多く手掛けるとともに、自らの資格取得経験を活かし、勉強法、生涯学習、スキルアップ等に関する記事を執筆している。

趣味は、ディンギーヨット・モーターボートに乗ること、文楽鑑賞、ウルトラマン。



撮影：：[ブライダルコスチューム石川](#) 様